

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：44417

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18678

研究課題名（和文）トルコにおける学習漫画による防災教育の実践と課題—難民の子どもを事例に—

研究課題名（英文）Practice and Issues of Disaster Prevention Education by Learning Manga in Turkey
- Focusing on Cases of Refugee Children

研究代表者

Cakir Murat (Cakir, Murat)

関西外国語大学短期大学部・英米語学科・准教授

研究者番号：60758176

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、トルコにおける義務教育段階の難民の子どもへの学習漫画による防災教育の効果と問題点を明らかにすることを目的とする。現在、トルコは、シリア難民の子どもへの教育機会の保証は確保されようとしているが、個人的・組織的支援の課題が多く、学校段階が上がるにつれて未就学となる傾向にある。またトルコでは学校での防災教育は複数の科目内で教えられているが、学校の他の学習活動の中での漫画の活用は注目されるようになった。筆者は上記の目的の解決のために日本の学習漫画に着目して新たな学習漫画による防災教育を導入した。その結果、学習漫画による防災教育について子どもの知識レベルが高まったことを示す有意な差が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本のような難民の存在は少ないことから、今後の日本の防災教育の研究においても大きな示唆を与えるものだと考えられる。また、トルコだけでなく、類似の問題を抱えている国々のための可能なモデルとして開発することにより、発展的な価値がある。また日本には、学術振興の上でこれまでに培われてきた「防災教育と漫画の文化」のグローバルの視点から見る有用性、発展可能性の検証と、日本の防災教育のグローバルなネットワークモデルの開発に貢献できよう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the effectiveness and problems of disaster prevention education using educational manga for refugee children in compulsory education in Turkey. Currently, Turkey is trying to guarantee educational opportunities for Syrian refugee children, but there are many issues with individual and organizational support, and the higher the school level, the more likely they are to not attend school. In Turkey, disaster prevention education is taught within multiple subjects in schools, but the use of manga in other learning activities at school has become a focus of attention. In order to solve the above objectives, the author focused on Japanese educational manga and introduced a new disaster prevention education using educational manga. As a result, a significant difference was found indicating that children's knowledge level about disaster prevention education using educational manga had increased.

研究分野：教育学

キーワード：シリア難民の子ども トルコ 学習漫画 防災教育 地域住民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本はこれまでに培ってきた「独自の災害・防災文化」を生かし、現在、文部科学省やODAなどを通じて、国際的にその成果を輸出しようとしている。一方、災害・防災対策はその地域にある全ての組織の共通課題として捉えられ、その訓練に各組織のメンバーと保護者や防災訓練ボランティア等の参加が欠かせないものとして考えられてきた。これに関して、ト部(2008年)は、「子どもを守るのは学校、家庭、地域であり、防災訓練や機械があるときに大人が防災の知識を持って、子どもと大人と一緒に考え、子どもたちに家庭や地域の危険のある場所を具体的に教える」と述べており、日本の「防災文化」がさらに未来へと伝承されていくと強調している。一方で、文部科学省の「防災教育支援に関する懇談会」によると、各地域の防災教育の取り組みは「点」に留まり、広く社会全般に「面」的なネットワークで広がりを見せることができないことが最重要な課題として指摘されており、その成果の共有・継承のための仕組みの未発達などが指摘されている。これと同様にもう一つ輸出されているものは漫画である。日本では様々な分野で漫画による学習の実践が行われてきている。大黒・竹中・稲垣(2008)と布施・岡部(2009)の研究ではすでに学習における漫画の効果が検証されている。大学生および小学生を対象に行われた自体把握型など先行研究では、ビデオクリップ視聴を中心としたプログラムをより短時間に、かつ具体的に伝えるために漫画を用いることが効果的であることが明らかにされている。

トルコも日本と同様に地震などが多い災害国である。防災教育の早急な実践は、地域社会からも希求されている。トルコにおける地震について地理学や政治学などの分野による先行研究と「地球規模課題対応国際科学技術協力 科学技術振興機構」の報告書によると、トルコ政府も首相府災害管理組織(AFAD)を設置し、災害システム構築と防災教育の実施を重要視しているが、それが地域を超えて全国的な展開ができていないことが課題とされている。そもそも政府の防災の仕組みが、成立段階にあり、国民への啓発とその防災教育による継承は、いまだに実現されていないのが現実である。他方で難民の現状に関しては、トルコの入国管理局によると2017年現在約300万人のシリアからの移民を受け入れており、そのうち約70万人以上が子どもである。これまでにシリアからの移民のトルコ社会への適応のために政府のAFADを中心に、多くの大学や国内NPOも教育プログラム等が実施されてきたが、AFADとHuman Rights Watchの調査によると70万人の子どものうち、40万人は学校教育を受けておらず、残りの6万人弱は公立学校、25万人の臨時的教育機関で教育を受けている状況である。

日本において「防災教育」文化が成立しており、生涯学習・社会教育、企業研修、NPO法人などによる専門教育、一般教育の分野で漫画が使用されているが、社会全般に「面」的なネットワークで広がりを見せることができない。一方でトルコでは、国際的に日本の防災教育支援を受け入れており、AFADを中心に推進しようとしているが、広まらない。さらにシリアからの難民が多く、その子どもたちの半分以上が教育のサービスを受けることができていない状況である。ここで考えられるのは、もっとも災害弱者となっているのが、学校教育サービスは十分に届けられていない子どもたちであり、震災などが起きた場合、トルコ人でさえ十分に支援を受けられない可能性があるばかりではなく、難民の子どもに至っては支援が十分に届けられるとは限らない。よって、学校に通えていない子どもに自分を守る術を身に付けさせることが緊急な課題だと考えたのである。本研究の問題意識はまさにここにある。そこで、上記の問題の解決において、日本の防災教育モデルと日本独自の文化の一つである「漫画による防災教育」を実施することは大きな意味をもっており、トルコの防災教育にとって極めて重要かつ有効的であると考えられる。日本では総務省による災害弱者の情報通信提供は行われているが、トルコのような難民の存在はないことから、本研究の挑戦は、トルコだけでなく、類似の問題を抱えている国々のための可能なモデルとして開発することにより発展的な価値がある。また日本には、学術振興の上でこれまでに培われてきた「防災教育と漫画の文化」のグローバルの視点から見る有用性、発展可能性の検証と、日本の防災教育のグローバルなネットワークモデルの開発に貢献できよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、トルコにおける義務教育段階の難民の子どもへの学習漫画による防災教育の実践に挑戦し、その効果と問題点を明らかにすることである。まずは、トルコにおける難民の教育現状と問題点や課題について文献調査を行う。次に、学校に通えていない義務教育段階の子どもが家庭や大人と一緒に学ぶ学習内容について半構造化面接と質問紙調査を行い、学習漫画テキストの開発を試みる。最後に開発した学習漫画を実施しその効果と課題を検証する。

3. 研究の方法

本研究の対象は、トルコにおける学校に通えていない小・中学校の年齢のシリアの難民の子どもである。対象地域は、イスタンブールにある難民が住んでいるFatihとEsenyurtの2つの市である。日本の学習漫画としての防災教育の資料として参考にするのはセーブ・ザ・チルドレンが推奨する子ども向け防災教育漫画「とっさのひとこと」を参考にし、難民の子どもにあった独自の学習漫画を開発する。本研究の方法として混合型研究手法(抱井尚子、『混合研究法への誘い』遠見書房、2016)を採用する。その理由は、まず1つ目は、研究が当初計画どおりに進まない時の対応であり、2つ目は定性調査(グランデッド・セオリーアプローチ)と定量調査の欠

点を補いつつ、研究の目的を達成するうえで両方の方法の良さを生かすためである。徹底した現状把握と分析に基づく研究を目指し、正確性の維持、誤認の防止、再確認、再思考の担保として、できる限り音声データ及び映像データの確保に努める。音声及び映像は、インタビューにおける聴取者、参加者間の相互作用や表情からのメッセージが読み取れ、さらには認識と行動の乖離の把握も起こりうるるところから、事前想定や独善的判断の回避、さらには思いがけない発想や展開が期待でき、研究協力を受ける有識者からの知見や参考文献を合わせて、グローバルに通用する斬新な視点を含むチャレンジ性豊かな研究を目指す。定量調査からは実施する学習漫画の効果を数量的に表して一般化し、その課題を明確にする。さらに課題の解決に向けて、定量調査を実施し、さらに掘り下げるべきところを絞り、深く追求するために再度定性調査を行う。

4. 研究成果

本研究の目的は、トルコにおける難民の子どもへの学習漫画による防災教育の実践に挑戦し、その効果と問題点を明らかにすることである。具体的には、「課題1：トルコにおける難民の現状と課題に関する文献研究」、「課題2：難民の子ども向けの学習漫画の開発に向けての現地調査」、「課題3：難民の子ども向けの防災教育学習漫画の実施と効果の検証」の3つの課題について研究を行ってきた。以下において、この3つの課題に沿ってその成果について説明する。

1) トルコにおける難民の子どもへの教育に関する現状と課題

移民局と移民団体によるとトルコには、2023年1月19日現在、3,535,898人のシリア人難民が滞在している。トルコにおけるシリア難民の大人の数19歳から90歳以上の男性の場合は1,029,276人、女性の場合は、811,342人、合計1,840,618人であり、男性の数が女性より200,000人多い。トルコでは義務教育期間は高校卒業までであるが、その期間は、シリア難民の子どもの5歳から18歳の児童生徒に当たり、その義務教育就学年齢期の児童生徒の数が1,177,000人であり、子どもの総数の3分の2以上を占めている。

表1は、シリア難民の子どもの就学する学校の種類としては小・中学校が最も多く、全体の半数を占めていることを表している。未就学については、シリア難民の子どもは中学校卒業段階から学校教育から離れており、義務教育を終えている子どもは全体の半分近くになっている。男子のほうが女子より就学している数は若干多いが、学校段階が上がるにつれて未就学する傾向にあることがわかる。高校の場合、女子生徒の数が男子生徒の数を上回っていることが、シリア難民の1つの特別な事情を象徴的に示していると推測される。

表1 シリア難民の子どもの就学状況

教育段階	男子	女子	就学総数	未就学総数	合計
就学前	20,617	19,930	40,547	77,536	118,083
小学校	162,123	151,572	313,695	103,851	417,546
中学校	136,649	132,103	268,752	67,200	335,952
高等学校	51,682	56,130	107,812	144,960	252,772
合計	371,071	359,735	730,806	393,547	1,124,353

多くの国の難民がトルコにいるが、シリア難民の子どもの人数が最も多い。上記のように、シリア難民の問題は、トルコにおける難民問題の中でも難題の1つになっており、シリア難民の子どもの教育に対する取り組みが大きな課題となっている。

つぎに、シリア難民の子どもに対する組織的支援の実態と課題について、教育機会の保証はできる限り確保されようとしているものの、今では臨時教育センターで開発したトルコ語での教育に関して難民の子どもの特別なニーズに応えるためのカリキュラム開発が盛んに行われている。また、政府、国際機関、NGO・NPO等、多くの支援機関が教育支援に取り組んでいるが、それぞれの組織間の連携不足や重複も課題とされている。さらには、支援機関間での情報共有等が不十分であり、教育支援の組織的な管理の是正が求められている。これらの子どもは、通常の学校教育に参加することの困難さを抱いているために、個別の支援や特別なプログラムが必要不可欠とされている。したがって、シリア難民の子どもに対する組織的支援の課題は、シリア難民コミュニティの文化や言語を尊重しつつ、トルコの教育制度に統合されるよう、資金の適切な配分や特別なニーズへの対応等に関して、政府、国際機関、NGO・NPO等が連携し、包括的な支援体制を構築することである。また、シリア難民の子どもに対する個人的支援の実態と課題について、多くの先行研究を参照してみると、トルコ語教育の不十分さ、シリア難民の子どもの人数割合の地域差、シリア難民の子どもの家庭環境、子どもの身体的精神的状態等、4つの課題が挙げられており、その解決策が求められている。

2) トルコにおけるトルコにおける防災教育の現状と課題

トルコにおける災害対策本部組織構成は国家レベルの「政府指令センター」と県レベルの「災害緊急管理センター」からなっている。国家レベルの施設については、災害時には、アンカラにあるAFAD中央の本部施設において、首相を含む閣僚が指揮を執り、また同施設内には地震観測センターも併設され、地震の規模や被害を確認することができる。県レベルについては、現状の施設の整備状況は県ごとに様々であり、専用の建物を有している県もあれば、県AFADの事務所としても専用の建物は持たず施設の一部を間借りしている県もある。また、教科としての防災教育についてだが、トルコでは学校での防災教育は、「防災」という単一科目はない。初等教育で

は、トルコ語、生活科学、科学技術、社会、体育の授業の中で、また、中等教育では、科学技術、地理、体育の教科の中に入れ込んで、複数の科目の中で教えられている。各学校には、カウンセリング専門の教員があり、被災した児童の対応を行っているが、教員、生徒ともに防災教育が十分ではない。次に、教科書改訂と防災教育の内容について、2004年にEUの基準に即した教育を実施するための改定があり、社会、生活科学、科学技術、トルコ語の教科書の内容や防災教育に関する習得目標、災害メカニズム、災害時の身の処し方、過去の災害の状況、防災対策などについては、防災教育の中で習得することになっている。1から5年生は、防災に必要な物資の準備、身の処し方に重点があり、6から8年生では、災害対応方法、災害の現象を学んでおり、課外活動内の防災活動としての防災教育と民間防衛活動の防災教育が行われている。トルコでは全ての学校に義務付けられている民間防衛計画の中に、緊急対応活動計画が盛り込まれており、捜索救助、応急手当などの緊急対応計画も含まれている。しかし、学校において能動的な学習の機会は非常に少なく、殆ど国の行政機関が行うものであり、NPOやボランティア団体等の民間組織は学校における防災教育には参加できていない現状も存在する。

震災などが起きた場合、トルコ人でさえ十分に支援を受けられない可能性があるばかりではなく、難民の子どもたちに至っては支援が十分に届けられるとは限らない。よって、学校に通えていない子どもに自分を守る術を身に着けさせることが緊急な課題である。その中でも特に心配なのは、学ぶ機会が得られない子どもには、震災から自分を守り、家族を守る能力を彼らにまず身につけさせなければならない。一方で日本では様々な分野で漫画による学習の実践が行われている。多くの研究ですでに学習における漫画の効果が検証されている。したがって筆者はこの緊急な課題の解決のために日本の学習漫画に着目し、全ての子どもが学校や家庭で大人と一緒に学ぶ「防災教育の教材」を開発し普及させることを新たな防災教育の方法として導入する。

3) シリア難民の子どもへの学習漫画による防災教育の効果と課題

トルコでは漫画の歴史は、おおよそ150年近くある。よってトルコにも国民が馴染みのある「漫画文化」が存在している。その歴史的変遷について次の4つの期間で説明できよう。第1期は、オスマントルコ帝国終焉期(19世紀末期~1922年)から独立戦争終了(1919年~1922年)までである。第2期は、共和国宣言(1923年)から1950年代までである。トルコは、近代化を実現した西欧諸国のような新たな国づくりを推し進めるために、教育改革関連で1927年以降の美術教育の浸透とその社会的意義の拡大を狙った取り組み及び1928年にラテンアルファベットの文字を基本とする文字改革は、トルコの漫画の発展に大きな影響を与えた。新たな国家形成のプロセスで出てくる様々な問題が漫画によって国民に知られることになった。このことは当時の漫画が国民にとっては情報収集源の一つであり、学びの機会となったという点で、生涯学習または社会教育的な機能を果たしていた。第3期は、トルコにおける漫画の黄金時代(1950年代前後から1970年代後半まで)であり、50年代と言われている。トルコの共和国宣言まで、漫画家は自由に表現できる環境がなかった。しかし、1960年代に入ると、トルコ漫画は残念なことに停滞に入ってしまう。第4期は、1980年代からのデジタル時代期の開始から現在までである。トルコ漫画にとってこの時期以降は「漫画のデジタル時代」と言われている。2000年代から漫画をネット上無償で漫画も読むことができるようになった読者にとっては、漫画を介したコミュニケーションと学習の新たなスタイルと場になったといえよう。

学習漫画による教育について、2016年のUNESCOの「グローバル教育モニタリングに関する報告」の中で、漫画を使用したことと相まって2010年前後、特に2016年以降は学校での漫画を使用した教授学習についての研究が多くみられるようになった。例えば、教科横断型学習における漫画の影響、トルコ語、社会科、理科、英語等における漫画を活用した教育に関する教員志望者の意識調査等、漫画に着目した先行研究がある。特に社会科とトルコ語についての研究等が多い。これらの研究成果から、学校段階を問わず、漫画での教授学習活動において子どもの興味関心が高いこと、漫画を活用した学習の方が教科書よりも学力は向上していることの2点があげられている。このように漫画は、教育者や学習者にとって学習の新たなスタイルとして効果的なツールであることが認識されてきており、学校教育の中に位置づけられるとともにその学習効果において大きな意義を持つことが理解されている。

(1) 難民の子どもへの学習漫画による防災教育

調査概要

質問紙調査の実施にあたっては、2020年にトルコ大使館から調査実施の協力を得て、トルコでの調査実施の許可を得ることができたが、3月に予定していた質問紙調査の実施が新型コロナウイルス世界的な感染拡大により急遽中止することとなった。2023年度から、トルコ全国知事選の準備期間が始まり、翌年3月に選挙が実施された。選挙準備期間であったため、トルコ大使館や現地の行政機関から調査実施の許可を得ることができなかったが、4月現地での研究協力者の協力を得て調査を実施した。しかし、研究開始当時に研究対象者としてシリア難民の子どもと設定したが、6年だった現在、その子どもの居場所や存在を確認することが難しく、政治的・社会的に敏感な課題となっているため、難民の子どもだけに調査することは難しい現状にある。そ

ここで、通学する難民の子どもに研究対象を変えて、調査を実施したが、シリア難民の子ども的人数が少なかった。本調査で使用した学習漫画はシリア難民向けの防災教育を行うために独自に作成した「Gel Beraber Depremden Korkmamayı Öğrenelim (地震を怖がらないことを学ぼう)」である。調査は、ある小学校4年生の3クラス、約60人の生徒を対象に実施した。調査では、学習漫画による防災教育を実施する前に、質問紙調査を行い、防災特に地震に関する知識を図り、その後に学習漫画による防災教育を実施した。調査は、地震が起こる前の知識、地震が発生している時の行動に関する知識、地震が終わった後の行動に関する知識の3部から構成されている。2週間後に防災教育を実施する前に行った同質問紙調査を実施して、子どもの知識の変化の検証を行った。調査の実施はウェアラブル端末上で、質問紙調査及び学習漫画による防災教育をおこなった。現在単純集計が終わり、相関関係や多重変数分析を行っている。

調査結果

質問紙調査の単純集計の結果について、調査に協力してくれた子どものうち半数以上が男の児童であった。父親の職種を見ると半数近く会社員で、その他は自営業であった。母親の半数以上は、専業主婦で、次に会社員や自営業の順となっている。父親の6割以上と母親の4割以上は大学卒業をしている。子どもの7割以上は父母と、2割以上は母親と同居している。3割の子どもは漫画を読んだ経験がない。また、学習漫画による防災教育の前後において、質問項目による差があるが、2点程度の差がみられて、防災教育に対する子どもの知識が増加しており、一定程度の候があることを確認できた。トルコ人の子どもと難民の子どもとの知識には差がみられなかった。それは、学校においてトルコ人の子どもと同じく定期的に防災教育が行われていることと、難民の子ども数が少ないことが原因であると推測される。そこで、3部の項目での違いを見ると、地震が発生する前の知識と地震発生後の知識に関して、有意な差がみられるものの、地震発生時の行動に関する知識の場合、大きな差がみられなかった。主に地震発生前の準備に関する認識と行動及び地震発生後の認識と行動に関する知識推移が高い。なぜ地震発生時の認識と行動に関する知識推移が低いのか、その原因の解明が必要である。自由記述の内容を見ると、学習漫画による防災教育は子どもにとって「わかりやすく、新たな知識が得られて、楽しかった」、「知識が増えた」、「地震発生前、地震発生時、地震発生後に関して勉強になった」、「とても教育的な内容で勉強になった等」のコメントがあって、学習漫画による防災教育は効果的であることが理解されよう。

4) 今後の課題

このように、学習漫画による防災教育は一定の効果があることが確認できた。子どもにとっても、文字の多い教科書で学ぶより、文字が少なく、絵を中心にストーリーが展開される学習漫画での学びには、その内容の分析・検証を行った結果、学習漫画による防災教育について子どもの知識レベルが高まったことを示す有意な差が認められた。しかし、質問紙調査の質問項目、学習漫画の語がされうる表記、調査対象の人数の増加の面でいくつかの課題を発見した。今後は挑戦的技法が研究の機関が終了しても、難民の子どもが集中している学校での調査を行い、学習漫画による効果の検証とモデルの作成を行っていきたい。

文献

- multeciler.org.tr/turkiyedeki-suriyeli-sayisi/ (最終閲覧: 2024.4.1)
- <https://www.goc.gov.tr/ikamet-izinleri> (最終閲覧: 2024.4.3)
- EMINE Saklan, Kasım Karakütük. "An Analysis on Educational Process of Syrian School-Age Children in Turkey" Mersin University Journal of the Faculty of Education, 2022, Sayı. 81, p. 65
- 大黒孝文, 竹中真希子, 稲垣成哲, 「協同学習の理論と方法を習得するためのマンガ教材の開発」, 『日本科学教育学会第32回年会論文集』, 2008
- 布施泉・岡部成玄, 「情報倫理教育における学習教材 - ビデオとマンガの有利・不利 - 」, 『電子情報通信学会技術研究報』, Site, 技術と社会・倫理 109 (330), 2009, pp:65-70
- ÖZÇUBUKÇU Yasemin. "Caricatures as a Witness of Social Changes and Education in The Early Republic Era in Turkey (1928-1940)". Ankara University Department of Educations Cultural Grounds (Masters Degree). 2013. p:21
- UÇAN Bahadır. Türkiye 'de Karikatürün Dijital Dönüşümü: Uykusuz Dergisi (トルコにおける漫画のデジタル化: ウユクスズ雑誌). TOJDAC / The Turkish Online Journal of Design Art and Communication. 2013. Volume 3, Issue 3, p:44
- AFAD, Doğal Afet Nedir ve Afetlerin Özellikleri (自然災害とその特徴), <http://www.icisleriafad.gov.tr/dogal-afet-nedir-ve-afetlerin-zellikleri> (最終閲覧: 2024年3月22日)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 チャクル・ムラット	4. 巻 第113号
2. 論文標題 トルコにおける漫画の歴史の変遷と今日的動向に関する考察 教育における漫画の可能性に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西外国語大学『研究論集』	6. 最初と最後の頁 319 - 336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007981	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 チャクル・ムラット	4. 巻 第12号
2. 論文標題 トルコにおける自然災害と災害教育の現状と課題単著	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教職研究・実践集録	6. 最初と最後の頁 1 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 チャクル・ムラット
2. 発表標題 トルコにおける漫画の歴史の変遷と今日的動向に関する考察
3. 学会等名 東アジア日本研究者協力会議第7回国際学術大会（共同）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 チャクル・ムラット
2. 発表標題 トルコにおける漫画の歴史の変遷と今日的動向について
3. 学会等名 日本マンガ学会
4. 発表年 2020年～2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 貴徳 (Kobayashi Takanori) (90753666)	専修大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (44417)	
研究分担者	具 本媛 (Koo Bon Won) (10758014)	京都精華大学・マンガ学部・講師 (34317)	
研究分担者	姜 京守 (Kang Kyoung Soo) (30757985)	関西外国語大学・外国語学部・教授 (34418)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	カディリ・アリ・スルマル (Kadir Ali Sirmali)		
研究協力者	アレヴィ・トプチュラル (Alev Topcular)		
研究協力者	ベテュル・エルギユン (Betul Ergun)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------